

---

# 残念な幼なじみ

水森 白子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残念な幼なじみ

### 【Nコード】

N3931R

### 【作者名】

水森 白子

### 【あらすじ】

上級貴族の息子サフライは下級貴族の娘エマリアが好きで好きで仕方ない。

自分のことではいっばいいいっばいな鈍感エマリアにこの愛は届くの？

？

「エマリアが来てるって！」

朝早い時間、サフライは自室のベッドの上で気怠げにかきあげた、青みがかった銀髪に縁取られた青い瞳が大きく開かれ、執事キライトに渡された紅茶をゴクリと飲み干し、慌てて支度を始めた。

上級貴族であるゲンランド家の数ある応接間では一番小さい部屋で、下級貴族の娘エマリア・ラッセは、幼なじみであるサフライ・アーマルド・ゲンランドを待ちながら、自宅ではまず味わえない香り高い紅茶にフニヤリと顔を崩していた。

（やっぱりサフライのこのお茶もお菓子も最高に美味しい〜）

2

「エマリアー!!」

扉が勢いよく開けられ、端正な顔がエマリアに飛び込んで来た。

ギユウギユツと、抱きしめられ貴族の青年に似つかわしくないスキンシップたっぷりの挨拶にエマリアは、犬か子供にしか見えないらしく、軽くポンポンと背中を叩きながら

「おはよう、サフライ

朝早くからごめんね。」

サフライには、天使に見えるエマリアの微笑み。

柔らかい金髪がキラキラ輝き、紅茶色の瞳に吸い込まれそうだと17歳の男性とは思えない程、ぼやあゝと頬を染めて悶えるサフライにまだ寝ぼけているのかと、内心、エマリアは笑いが止まらなかつた。

「エマリアが訪ねて来てくれたんだ。気にしないで。そろそろ話をしなくちゃって思ってたから、嬉しくて嬉しくて……、僕の気持ちに分かつてくれたのかなあって……。」

もじもじしながら美形が話すのって不思議だなあと、話はスルーされてるとはつゆ知らず、サフライはエマリアの両手を握りしめて息を大きく吸い込んだ。

「エマリア！僕と「あのね、サフライ。私、今日から王宮で侍女見習いに行くからしばらく会えないの。朝早くて悪いんだけど、お別れを言いに来たんだ。」

「……………」

「サフライ？……………やだ！何泣いてるのよ！半年後にはお休みあるから、また会えるわよ……………って、サフライ？本当に大

「丈夫？」

執事キライトには、実に面白くも残念なご主人の大泣きはしばらく続いた。

ようやく、泣き止んだ頃にはサフライの顔は見るからに倍以上に腫れ、美形だった面影はかなり薄くなっていた。

「エ、エマリアがひ、ひどいこと言うから、ぐずっ、わ悪いんだあ。」

「あー、ハイハイ。悪かったわ。いきなり過ぎてダメだったのね。」

ぐずぐずしているサフライの鼻をチーンとハンカチで吹きながら、小さい子供の様にべったり腰にくっ付いた17歳の男性にエマリアは、6人いる弟たちを重ねていた。

「なんで、いきなり王宮に行くなんて言い出したの？」  
埋めていた顔をあげ、美形度が回復しつつあるサフライはエマリアに聞いた。

「家が貧乏なのは知ってるでしょ？私の下に6人弟たちがいるから、そろそろ色んな意味で厳しい家計なの。」

「知ってるよ。エマリアの屋敷らしきところが廃墟にしか見えないことも、床が抜けることも、だから僕と「なら、言わなくても分かるでしょ。私も働いて家を助けなきゃいけないのよ！」

「なら、お、お嫁さんになれば、いいと思うけど……ボクの」

再びもじもじしながら頬を染めてエマリアを見上げたサフライに目もくれず、執事キライトにお茶菓子を包んでもらい、ホクホク顔のエマリアは、じゃ、時間だからと腰に巻きついていたサフライをペイッと剥がし、

「半年後の休暇の時にまた来るわね。サフライ、お腹だして寝ると風邪引いちゃうから気をつけなさいよー（笑）  
キライトさん。お菓子ありがとうございます。また、美味しいもの  
お願いしまーす。」

ペこりとキライトに頭を下げ、  
ボタンと閉められた扉にサフライは腕を伸ばし、キライトにはギロリと睨みを効かせた。

「お前、何、エマリアを菓子で釣っているんだよ」  
「エマリアお嬢様がしばらく食べられないので是非にとおっしゃったものですから。」  
慣れているせいかヒンヤリする美形ブリザードを浴びても動じることなく、自分より少し年かさの執事は淡々と答えた。

キライトの内心は爆笑の渦に巻き込まれていたが、ご主人の恨みがましい視線に次はどう出るのかとワクワクしていた。

？

執事に対する一方的な睨み合いは、スツと立ち上がり貴公子然としたサフライの様子に終了を迎えた。

「今日の父上の予定は」

「本日は午後から会議で登城致します。まだ自室でお休みだと「叩き起こせー!!」「」

キライトが一礼して退出すると、エマリアが座っていたソファアを見つめ……………、ため息をついた。

「今日からこちらでお世話になります。エマリア・ラッセです。」

ペコリとと挨拶をしたエマリアにニコリと美しい笑みを浮かべ指導係と紹介された女性は、

「やり直し」

「はい。」

お辞儀のやり直しを数回繰り返し、ようやくOKをもらえた。

「よろしくお願い致しますわね。あなたの指導係でシリユ・ハザンよ。厳しいかもしれないけどあなたの為だから我慢なさいね。」

美しいお辞儀にぼかんとしているエマリアに「口」と、顎の下に手を当てグイッと閉められた。

「はい、申し訳ありません。ありがとうございます。」

エマリアが王宮に入ってすぐに紹介されたのがシリユだった。美形なサフライ家族を知っているはずなのに、彼女の美しさには同性なのにドキドキしていた。

エマリアと同じ金髪に薄い緑色瞳、顔や体のパーツはお人形さんの様で、サフライの屋敷で小さい頃遊んでいたビスクドールみたいと思い出しては口元が緩んだらしく、

「ニヤニヤしないのよ。人前ではポーカークォフェイスでいなさいね。」と、再び顎に手を当てられ妙に顔に近づいて囁かれた。

サフライからの激しいスキンシップは、何とも思わないのにシリユからは声だけで背中がぞくぞくする。

（何だろうか？新種の風邪かなあ…。）

頭を傾げるエマリアを見つめ、クスリと笑うとシリユは、その後あちこち仕事に関する場所への挨拶回りへとエマリアを連れ出した。



？（前書き）

読んでいただいて、ありがとうございます。

お気に入り登録ありがとうございます。

嬉しい原動力です（泣）

文章が一部欠けていたので再投稿しました。すみません（<|>）

？

エマリアがシリユに付いて仕事を始めて、一番びっくりしたのは、シリユの仕事量が半端なく、多岐にわたっていたことだった。

炊事場、水場はもちろん、王族のプライベートな空間で女官をしていたと思いきや、屋根の家を掃除したり、近衛の兵士などが訓練や寝泊まりをする、ゼファードの塔（別名：キャツ 男だらけの魔窟）に出入りしていたり、それは侍女の仕事なの？と、疑いたくなつたが意外にもエマリアは楽しみながら侍女見習いとして頑張っていた。同じ様な時期に入ってきた見習い仲間内では、気の毒にという顔をされていたが、家のことを考えてはそんな状態ではないので、自分を使い物にするための勉強だと気にはならなかった。

そんなこんなで1ヶ月半程経ったある日。

「これから、ゼファードの塔に行くわよ。」

「はい、シリユ先輩。」

何しに行くのかは、特に詮索せずにシリユに付いて（別名：キャツ 男だらけの魔窟）の扉をくぐった。

入ってすぐの円形闘技場にはどこかの部隊だろうか、一様に長い槍を持って組み手を交わしている。

その中でも一際目を引く大柄な男性向かってシリユは、珍しく大きな声と笑顔で呼んだ。

「ヴァーン!!」

だいが遠くに居たはずなのに凄い勢いでこちらにやってくる熊の様な体格の男性は、手を振りながらシリユに近づいた瞬間、

シュン!?

顔の横に涼しい風がかすった。

バキツ!

耳元で痛い音がした。

キンツ!!

目の前で火花が散った。

「ハイハイ、危ないからお嬢ーちゃんは退いていよおなあ。」  
子猫のように首根っこを掴まれて少し後退させられて、後ろを見上げると人のよさそうな小熊サイズな人がエマリアを見つめ、目がなくなる位にんまりと笑った。

「アレ、初めて見たのかあ?」

コクコク頷くと

「あの二人は、恋人同士なんだぜえ。」

びっくりして、いつの間にか槍を持っているシリユを目で追いかけて、恐る恐る聞いてみた。

「あの……、お二方は闘っているように私には見えるんですけど……。」

「ああ、あれが団長の愛情表現なんだとお。俺らにはわかんねえけ

どなあ。「苦笑しながら小熊さんは、しばらくは続くからこつちで見学してなと、闘技場端に連れてきてくれた。

ガシッ！！

シリユが手にしていた槍で、ヴァーンの蹴りを避けると2人は笑いあいながら、

「ずいぶん、早いご帰還ね。向こうでへマでもしでかしたのかしら？」

「冗談は止してくれよ。まだ、部隊はあっちに残ってる。急に呼ばれたんだ。お前、なんか知らないか？」

「しがない侍女風情が何を知ってるのよ。」

「しがない侍女殿は、棒術がお得意と見えるがなあ（笑）」  
「……………」

ヒュン！！

「あつ……………ぶねえ。俺の首が飛ぶとこだったぞ？シリユ。」  
カカカカッ！！

「あら、残念。太過ぎるから細くしようとしただけよ。」

「ハハッ！！愛してるぜ、シリユ。」

「殺したいくらいにでしょう？」

ヴァーンは、首もとに向けられた刃を寸前でかわし、隠し持っていた小さなナイフを投げつけたが、シリユは槍で全て弾き、2人は間合いを取るべく接近戦から離脱し、お互いに楽しそうに笑みを浮かべた。

(シリユ先輩……………、格好良すぎ！)

キラキラした瞳でシリユを見つめるエマリアを興味深そうにみていた小熊さんは、

「なあ、お嬢ーちゃんは、侍女……その服は見習いかあ？」

「えっ！？あつ、はい。すいません申し遅れました。侍女見習いのエマリア・ラッセです。」

ぺこりと頭を下げるエマリアに

「ご丁寧にありがとさんなあ。俺はクライス・ラーゼ、王宮騎士団第2部隊にいる。今いちゃついてるのが、うちの団長でヴァーン・フィンチだ。」

クライスは、チラツと2人を見やり、自己紹介をした。

「そういえば、何度かシリユ先輩とこちらに来てるんですけど、クライス様には初めてお会いしましたよね？」

「そんなに畏まらなくても構わないよお。まあ、こつちに帰ってきたのは昨日なんだよお。」

「あ、じゃあ、クライスさんは、どこかに任務で行かれたんですか？」

大して碎けてないなあと笑いながらクライスは

「ああ、俺ら第2部隊は大体国境に近い所を定期的に回ってるんだけど、団長が急に呼び出されてさあ、仕方なく副団長と半分置いてきた訳。」

「何かあつたんですか？」

「何でも病気で入隊が遅れてた奴がいてなあ、それがとりあえず俺らの部隊に入るってえのを、団長に知らせに来たらこの様よお。」

「病弱な人が騎士様がつとまるんですか？」

「つとめるよ。だって、今、病気は治つたんだから」

エマリアは聞き覚えのある声を耳元で聞いた。

？

知ってる匂いがエマリアを包み込んだ。

「エッ！？サフ……………っ！？」

ぎゅぎゅぎゅぎゅー！！！！

「ああ……………、エマリアだ。エマリアの匂い、エマリアの柔らかさが足りない体……………あれ？……………また痩せこけた？」

ゴンツ！！

顎下からの衝撃に一瞬、星が見えたが、サフライはこの上なく幸せだった。

エマリアが振り返る間もなく、カいっぱい後ろから抱きしめ、もかく彼女を堪能していると、

カチャリ、

首筋に冷たい感触が伝わった。

薄目で首もとに当てられた二本の槍と、2人の殺気立った視線を浴びながら、クスリと笑った。

「誰だ？城に入ってくる変質者なんて初めてだな。」「あら、アナタも似たようなものじゃない。でも、三枚におろした方が良さそうね。」

「シリユ……（苦笑）」

物騒な会話がエマリアの頭上で交わされて、我に返った。

「ちっ違っんです！シリユ先輩、ヴァーン団長！このへんた……  
…いえ、彼は私の幼なじみでサフライ・アーマルド・ゲンランドと  
言います。」

「つてか、サフライ！いい加減離れてよ！重い！苦しい！じゃーまー」  
慌てて、サフライを庇うエマリアに、ふにやりと顔を崩して向けら  
れている槍先をスルリと抜け出しながら、エマリアをギューツと抱  
きしめた。

のらりくらりしながら、シリユとヴァーンから逃げたサフライをギ  
ロリと睨むヴァーンにクライスが

「あーっと、団長、団長そいつですよ。俺らが呼び戻された原因。  
ゲンランドの三男坊です。」

「ああ？ゲンランド！？五大貴族の坊ちゃんが何で今頃騎士団に入  
つてくんだ？」

「さつきから、知らせしようと思ってたんですよ。病気で入隊が  
遅れたそうですよ。」

「あれが病気がってんならまだ治ってなさそうだがなあ？」

「はあ、そうっすねえ。」

どう見ても、エマリアにベタ惚れしている坊ちゃんがじゃれついて  
るのを呆れたようにアホらしいと、2人はため息をついた。

「ちよーっと、いい加減離れてよ……！」

グイッと、抱きしめられた体勢から抜け出すエマリアをニコニコ見  
つめるサフライに、シリユの槍が軌跡を描いた。

軽くステップを踏んでかわすサフライに曇惑の微笑みでシリユが言  
った。



「ゲンランド様。たとえ、身分を証されても彼女は私の可愛い後輩。礼儀もなっていない貴族様に触って頂きたくはないんですが？」（散れっ！変態！）

「随分、私の可愛くて、可愛すぎて食べちゃいたいくらい大事な幼なじみ（直ぐに僕のお嫁さん だけどね。）がお世話になったようで、感謝しますよ。侍女殿。」

（エマリアに近寄るな！泥棒ネコめ！！）

どうやら、天敵同士が出逢ったようだと、睨み合いをしているのを見て、ヴァーンはニヤニヤと笑いながら、サフライに声をかけた。

「おい、新入り。感動の再会に水差してワリイけど、もう行くぞ。明日から忙しくなるぞー。」

シリユと睨み合っているサフライの肩を叩きながらクライスが、

「さあさあ、この辺で終わりにしようねえ。新入り君にはやること沢山有るからねえ。」

と、引きずって行くところをサフライは美形ブリザードで断固拒否した。

「いいえ。（まだ、肝心な嫁に来るんだ！エマリア はい、喜んでサフライ 計画）話がすんでいません。」

「まあまあ、明日の準備手伝ってやるからなあ。」

「明日？準備？何のことです。」  
初めて聞きましたと、怪訝な顔をするサフライにエマリアから声がかかった。

「サフライー！騎士団頑張ってねー。迷惑かけないようにしなさい。次に会えるは2ヶ月後だってー。待たねー！」

「うん エマリアー。2ヶ月後に待たねー……………」

…って、2ヶ月後…！！！」

いつの間にか、ゼファードの塔入り口付近にシリユと2人で仲良く笑って手を振っているエマリアに返事をしたまま固まった。

「オマエ……、ある意味不憫だよなあ。団長が言ってただろう。明日には、俺らは国境近くに戻るんだよ。」

クライスが苦笑いをしながら、ぶつぶつ呟くサフライを覗き込んだ。「有り得ない……、こんなに頑張ったのに、エマリアには一瞬しか会えないなんて……、クソッ！ 父上の嫌がらせかつ！ 寝起きを叩き起こしたせいか！ こうなったら……」

「オマエ……悪どいなあ。エマリアちゃんも可哀相に。」

グイツと、クライスは胸ぐらを掴まれ氷の様な冷たい視線を浴びた。「彼女は私のモノです。気安く名前を呼ばないで下さい。まだ、生きていたいですよね。」

「威勢がいいねえ。新入り君はあ、まあ、綺麗な顔で凄まじるとゾクゾクするから良いけどねえ。」ニヤリと笑うクライスに（何だかキライみたいだな……）ふいつと顔を背けた。

「何、ちんたらやってるんだ。クライス、早く新入り連れてこい。」ヴァーンがイライラしたのか2人を急かす。

「さあ、団長がお呼びだからなあ、行こうかサフライ君。なあに、今のままじゃラッセ嬢には虫はつかないよ。何せ、シリユちゃんがくっついてる。」

「（あの泥棒ネコが？）どこが大丈夫なんですか？」

「お気に入りなラッセ嬢に悪い虫がつくのは、シリユちゃんも良しとしないからさあ。」

「（ますます気に食わない泥棒ネコめ！！）……………」

もう見えなくなってしまったエマリアを探すように佇むサフライは、小さな子供の様にしょんぼりしていた。

？（後書き）

お待たせしました！

（待ってませんか、そうですね）<—>  
でも、押し付けます

∨（^ - ^）∨（

お気に入りが増えて嬉しいです。

ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3931r/>

---

残念な幼なじみ

2011年4月2日04時42分発行